生薬学担当教員による漢方教育に対する取り組み

三 卷 祥 浩,^{*,a} 小 林 義 典,^b 牧 野 利 明^c

Approach to the Education of Kampo Medicine by Pharmacognosy Faculty

Yoshihiro Mimaki,^{*,a} Yoshinori Kobayashi,^b and Toshiaki Makino^c

^aSchool of Pharmacy, Tokyo University of Pharmacy and Life Sciences; 1432-1 Horinouchi, Hachioji, Tokyo 192-0392, Japan; ^bSchool of Pharmacy, Kitasato University; 5-9-1 Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108-8641, Japan; and ^cGraduate School of Pharmaceutical Sciences, Nagoya City University; 3-1 Tanabe-dori, Mizuho-ku, Nagoya 467-8603, Japan.

わが国の明治以降の医療は西洋医学が中心であったが、近年、漢方医学が見なおされ、医師の9割ほどがなんらかの形で漢方薬を処方した経験を持っていると言われている。漢方医薬学研究の成果として漢方薬の有効性のエビデンスが集積され、併せて医学部において漢方医学教育が必修化されたことから、今後、日常診療で漢方薬を常時処方する医師はさらに増えることが推定される。また、医療費削減の一環としてセルフメディケーションが推進されているが、セルフメディケーションにおける漢方薬の期待は大きい。このような最近の医療動向を背景に、6年制の薬剤師教育のモデル・コアカリキュラムでは、「C薬学専門教育・化学系薬学を学ぶ C7自然が生み出す薬物」のなかに、従来の生薬学（生薬の基原、成分、薬効）と天然物化学（天然物の化学構造と生合成、医薬品への応用）に加え、「現代医療の中の生薬・漢方薬」の項目が取り入れられた。これにより、多くの薬学部で漢方薬に関する講義や実習が必修化された。また、これに先立ち、漢方に関する卒業教育・生涯学習を目的に、日本生薬学会と薬剤師研修センターは漢方薬・生薬認定薬剤師研修制度を設け、現在3000名近くの薬剤師が漢方薬・生薬認定薬剤師となっている。

平成27年度薬学部入学生から、新しい薬学モデル・コアカリキュラムでの教育が開始された。旧モ

デル・コアカリキュラムにおいては、漢方に関する内容が「C薬学専門教育・化学系薬学を学ぶ」に配置されていたが、新モデル・コアカリキュラムではそれが「E2薬理・病態・薬物治療 (10)医療の中の漢方薬」に移行された。E2項(10)の一般目標 (general instructional objective; GIO)は「漢方の考え方、疾患概念、代表的な漢方薬の適応、副作用や注意事項などに関する基本的事項を習得する」である。このように漢方に関する内容が完全に「薬理・病態・薬物治療」に移行され、併せてそのGIOが精査されたことで、漢方の講義担当者として「どの専門分野の教員がふさわしいのか」、「従来の生薬学担当教員が適切なのか」、それとも「薬理・疾病・薬物治療分野の教員が担当すべきではないか」など、各大学でいろいろと議論があったことが推察される。

漢方薬は言うまでもなく複数の生薬を組み合わせで用いる薬物であり、その薬効や副作用、相互作用などを理解するうえでは生薬学の基礎知識を無視しては語れないであろう。したがって、漢方薬の適応外の使用方法も含めた高度な臨床応用に関する内容は別として、薬学部において漢方薬の基礎に相当する部分は生薬学を基盤に、生薬に精通した生薬学担当教員が担当することが妥当ではないだろうか。

本シンポジウムは、生薬学担当教員の漢方薬に関する教育手法の共有を目的に企画したものである。早い時期から漢方に関連した講義を担当してきた生薬学担当の先生方から講義の具体的な内容と工夫をご紹介して頂くとともに、医療現場（病院）及び医療用漢方エキスのメーカー側から大学での漢方教育に期待すること、漢方の国際化時代における漢方

^a東京薬科大学薬学部（〒192-0392 東京都八王子市堀之内1432-1）、^b北里大学薬学部（〒108-8641 東京都港区白金5-9-1）、^c名古屋大学大学院薬学研究科（〒467-8603 名古屋市瑞穂区田辺通3-1）

*e-mail: mimakiy@toyaku.ac.jp

日本薬学会135年会シンポジウムS56序文

教育のあり方についても議論を行った。

シンポジストと講演題目は以下の通りである。

小池一男（東邦大学薬学部）「東邦大学薬学部での漢方教育の取り組み」

松田久司（京都薬科大学）「京都薬科大学での漢方教育の取り組み」

牧野利明（名古屋市立大学大学院薬学研究科）「漢方の国際化時代における漢方教育のあり方」

本間真人（筑波大学附属病院薬剤部）「医療現場側から大学での漢方教育に期待すること」

石田雅規（株式会社ツムラ医薬研修部）「企業に

おける漢方教育の考え方」

小林義典（北里大学薬学部）「新薬学教育モデル・コアカリキュラムにおける漢方教育」

本誌上シンポジウムは、このうち石田雅規氏（株式会社ツムラ医薬研修部）を除く 5 名のシンポジストによる Symposium Review からなる。

漢方薬に関する講義は、薬用植物学や生薬学の講義が一通り終わった 2 年次後期から 3 年次に開講される大学が多いと思われる。本シンポジウムの内容が、生薬学担当教員の漢方薬に関する講義の一助になれば幸いである。